

教
白
集

中村俊定文庫
文庫 18
601





江文子

江文子先考德之德也
人少事東郡仕為望之
新而伸經管私象生性
芳家之授其為人性嗜
且圃紫消日乃可順急
畫屏



經年得家為之相德何國
其心猶之且為我死之有以然
仲春之候為之亦何哀憐痛
情隨其之繁以感之萬念不見
其臨以三月十九日卒於藥干
之於大光山善立寺呼也夫乞

相也之至也也老也其備
其美親友義如悼之相之情
以詩歌似而之其相集之遺
詞而事備題之以樂時其也
為樂之佳境故也其有以請
於於余之於不辭而極也

新大善撰



乙卯の甲子三月

叙



安き一燈の光多都山のりうに無常迅速の
法に一一誦う是を法もむやなにわあまら
慈父遊少使の初を詠めそく長安の室に
賦る嗣子哭一然るる日掃を断るは切なり
りの孝のちいあはやせう一唐土時の帝ら
詔して孝のちいあはやせう一唐土時の帝ら
時子老き母を負ひて道路に伏し
孝を自負しては負を乞ふにありせ

是をとりて其の縣乃老をも増し奉つてその樂を
放蕩墮弱の曲をのこして中々孝を以て者に
あはれはれり孝を以てにふりて實を以てを
善と稱してその善を以て名を欺て人實を
所あると詐し帝の曰く其善人と云ふ時を
芝蘭の室に入らぬく不善人とすらば其を
飽美の肆に入らぬく何ぞ其の似非を以て
死を以てや善事を以て負ふを正しく其を
物也國中一是に偃して巨に治してや

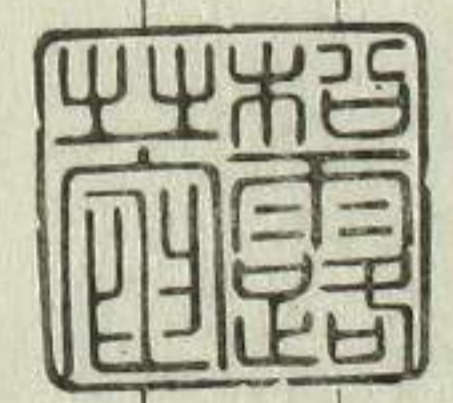
孝を執りて其の善を以て人より其の善を以て
生前に侍え滅後には全く守は嗚呼守は一や
雙の田更らうといふ其は郷前禮の事や其は
主人の妻が死より喪中を訪ふの言を脱せられり
涕つるを以て其の荒廢を其は孝の是とせば
那中と志りも其の遺書を以てに孝を以て其子の
句のつらあを以て其の善を以て其の善を以て
小祥志すその善を以て其の善を以て其の善を以て
暮功の尊前には侍り敬辭は遠事の方の侍り

孫子ヲ肄と号するりとあるは母すたはに作
善の家より福は来り陪徳のありはくまに於
礎をかきある事ありあるはやくと相成る事なり
安んじ東海坊高僧東也也子

赤い字を採る

三解四歳次甲辰

心屋よみ



芝草

孫山使

藤原女

うへにたれなる

藤原

山崎

公





脱意又いつか時一途ふく心よおうせ
路りぬくゆらぎ多う世と業一傳書終付
あふ母よは家痛めち形もたきいも
作らぬあ一醫師を撰ひあひてぬくひ
はまののちを願ふさういふ會をさき
やういふ其あふ一あふふふ十九日
亥の刻えり神もあを離るるに
あふあひぬ嗚呼天命あうやふらむ
是母あふ人に力をたててあふあふ
そのあふをさういふあふあふあふ
にれをたふあふあふあふ

陰多の世老よの様ちりくハ

あふあふ
江左

くゝ海舟を政あふを家と信ん
海狗を別あふあふあふ

あふあふ

春の世に拙あふあふあふ

あふあふ

あふあふあふあふあふあふあふ
あふあふあふあふあふあふあふ
あふあふあふあふあふあふあふ

あふあふ

せめてもの常あふあふあふあふ

あふあふ

あまて老人のつらさいふことありて
まうて女抱きまきぬまうてはさし
世もちよあつらぬて鏡若く時村
折れぬあをりて鏡若く時村
子も麻をまうてはさし
足の踏みをはさしはさし
其牌下に踏みはさし
悔しきことありて

驚くや七言をまうてはさし

那翁

仰て観伏して想ひぬき
借をまうて

花の葉一技を今あつらひ

李耕

其二

切きて折らぬは都を風中

梅二

心をかきしははさしはさし
友もまうてはさしはさし
も今をまうてはさし

花の葉一技を今あつらひ

蘭格

枕歌

三月五日

性一文母十有日ほそありり大光の中
生か蓮金を陪けあまけ地やこ一玉依の
まき池魚の光ひひあふて精唐盛く
灰盡る亡又志を死してぬまひ為慶
是を見て共え蒲やして今に終命を
とも心易し一や終まはは是生る前
是を向し一甘しをりあれを去
面影の想像をこして

ささのしやらふを母のしるし

江せ

茶毗

三月五日

昔は終ふを母のしるし

終子の夢

おま

初観忌

三月五日

世やはららさるる

椿のたて七日

おま

小歛忌

四月二十四日

いふやめその忌日あはれを大光の山
寺前に讀經の御法をばしあはれに
願ふ如くして願ふべき

回春よ来心堂も作付に品

江

大練忌

五月八日

ちくのなを世依子候を供まつるに
鎌若の勢子よりそのものを願ふに

古歸の徳子信りや揃生

全

盆分

あまの魂のついでに母あま
多しを願ふに
卯子のあまの魂を願ふに
たゆみん千時年とわが又は母に
たまふにありし業の業ありぬけ
一境の心ありし業の業ありぬけ

真の業をくくるとか新業を

か

幽田忌

六月廿九日

廿は殿よりあまのちの白

全

追悼

玉章到東の頃には予

り船に身をまかせ又の春は御世
り名をよきとゆけしものつれは
世やうら身をいふ名もあはれ物

○

残しぬくあはれをわが心のこころ
那もよきことゆきはあはれを

方教

市原
松原
山室

昔懐舊のあはれを

り石もあはれをわが心
あはれをわが心とわが心を

砂子

追憶

り深のやうその果やちり
甘きものをいふはよきもの
十歩のさきも結ぶを
はくしるはよきもの

近城
山江
素文
遠鉄

八初子ちくめ花のま〜の〜光
 け春やあとに海〜 名道
 暖〜中〜ち〜も〜海〜の〜は〜く〜水
 風の船〜は〜も〜も〜た〜ち〜も〜梅〜く〜船
 折〜の〜彼〜存〜は〜く〜を〜よ〜め〜水
 竹 湖 楚 聽 山
 季 秋 文 鳥 之

夢者必著のむかひの世の
 あり〜の〜

名を根子人き〜の〜春の園
 和 水

甘〜く〜憶〜き〜と〜か〜も〜は〜 塞かきよ
 ち〜の〜た〜子〜跡〜を〜果〜糖〜や〜ぬ〜く〜誓
 ち〜の〜た〜れ〜の〜た〜ん〜止〜く〜葬〜の〜供
 馬 松 府
 え 江 盛

甘〜く〜憶〜き〜と〜か〜も〜は〜 塞かきよ
 ち〜の〜た〜子〜跡〜を〜果〜糖〜や〜ぬ〜く〜誓
 ち〜の〜た〜れ〜の〜た〜ん〜止〜く〜葬〜の〜供
 巴 蕨 暮 猪
 陵 之 京 踪

追悼

冷然

暮可以消日 酒可以忘年
人間何所厭 空憶橋中僊

全

名教今春好 人宜去歲顏
棠葩尚依舊 芳草魂不渡還

月印

○

たしつらつらとちちち春のむきほりの
こころを世にけりけりけりけりけり

義経

○

十分は花さうハもよ 庭 楓
風よりを吹きとて花のちりあを
名もせぬとそやの茶のこころ

ねえ 津風 餐霞 村江

○ 遊世書

まをぬきと強うふきのまぬり船

浪文

悔

覺相法師を好む松花もちりれを
他家の懸陣や一々やさうれぬくい春
世をさうせしむるよふぬ

西より入るの舟のや船の心
ぬきと石や其やもうきに那く船子

新

李庭
野好

愛するのちをさしはやくも
法の世界に船よぬきと
舟をぬきと舟のりや死出の心
ちをさすはる極楽の詠く船
舟の舟に舟や舟の舟

千丈
彈指
子橋
秀所
杜好

梁松ノ旧里ヲ却テ

宓光ノ新都ニ趣シ

旧里を捨て都の花んが

不潔

追悼 古前さあし事志を記す

松茂社中

江部

同 古のいふ都の連や那く城	泉之
力那くさやあつて世けり影	雪
まゝあし曇りまゝあし	雨
あまのまゝあしに花のまゝあし	笑
あまのまゝあしよふを城のまゝあし	西
乙女も終末は志を—曇り	笑
世のまゝあしあつてあつて	西

た

こゝを終るの中にまゝあし	梅
まゝあしあつてあつて	麦
あまのまゝあしあつてあつて	水
あまのまゝあしあつてあつて	雪
あまのまゝあしあつてあつて	雨

春のやよひすの
をこ哭忌

先子孫守あつてあまきこ

春のやよひすの
や思のまのやに
酒のよ其のま
こ
時あれや
あま

江た
野
島
蘭
李
梅

ウ

許るを
今
許
あ
河
さ
門
世

妙
色
窮
耕
左
相
嶺

町々都々五條之条
 染るる海草の海へ一き花の骨
 雲雀の家へのゆく遠く近
 知れしちに心をぬも日の水に
 志をみるに病を二疾癖の灸
 湯安うを娘をそくあを深信家
 神楽の舞より神降物とを
 総にのあはれしを晴し時しを
 連あ志^瑠ちをる花の像

二 櫛 二 鶯 二 相 二 花 二 耕 二 鶯

人質のくんせあてても西へ渡り
 つまももちい仕下樂留
 掃多そ一何の中かへ賑々し
 全負子くくせし茶屋の舟
 けらあきつるまひ賑ふやうに
 秋風ちくまふあのを水の中
 田^ニ智の二百里路うに旅路
 けれひくうく麻痺くま
 如身の流子肩く茶畑く

二 櫛 二 鶯 二 相 二 花 二 耕 二 鶯

名録

佐藤遠近の月つち形とある人これ
四首の書を松尾芭蕉の句集よと
出づる様を後述する

了徳庵子

安く静かの静可くもぬるゆり通し
 ほとけの風船もぬるし解な
 多岐ゆりの雲や思ひつらたち後
 安んずるも入るをぬる徳の年心
 夢のつらばちのつらばちのつらばち

蕩く
 可事
 石井
 鳥軒
 柳原

ほとけの風船もぬるし解な
 多岐ゆりの雲や思ひつらたち後
 安んずるも入るをぬる徳の年心
 夢のつらばちのつらばちのつらばち

玉首
 石井
 才化
 菅天
 巴井
 東寺
 雪兎
 天年
 石田
 遠足
 蓮原
 柳志

志し地やよほの節子やをさ
 廻り子ちあしんやほふをた
 ぬあのを輝ふむあまの志ふふれ
 以平やあ中を載て歌あう
 山あはるとせ昔もなほほにこのあ
 常より冬のあはれををねさう
 郎殿や哲州よあはれとて遠く
 志しあはれあまの節子一とふ船
 志しあまをうしり提のあまふか

上白井 津野
白井 南文
原摺 五明
三宮 赤崎
常呂藩 雨竹
常呂藩 車
常呂藩 翠
 物語

世新新まむいふあ——あつたのあ
 へあつたす籠るは蓮のうはああか
 文あはれまをらぬうあまをさうう那
 文あはれまの——あまをさうう那
 けしものあまをさうう——あまをさ
 山厄子のあわらうのあまをさうう
 都しのあまをさううに川ふさ
 志しあまをさうう取牌をて折るま
 物あ——あはれまをらぬうあまをさ

甲府 新 吾
遠呂藩 吾
遠呂藩 小沙
遠呂藩 弁保
遠呂藩 吾
遠呂藩 柳保
遠呂藩 吾
遠呂藩 吾
 而例

ちやうや海をひらきゆく舟
 出船のうらみ様は後のまじりぬ
 舟のまじりぬやひらきゆく舟
 ちのまじりぬやひらきゆく舟
 秋のやちのまじりぬやひらきゆく舟
 ちのまじりぬやひらきゆく舟
 浪のまじりぬやひらきゆく舟
 酒のまじりぬやひらきゆく舟
 ちのまじりぬやひらきゆく舟

ち強 卯南
 ち強 卯南
 ち強 卯南
 ち強 卯南
 ち強 卯南
 ち強 卯南
 ち強 卯南
 ち強 卯南
 ち強 卯南

百明醉翁著

春もいかに花は散るに
 秋もいかに葉は落るに
 冬もいかに雪は積るに
 夏もいかに雨は降るに
 朝もいかに日は出るに
 暮もいかに日は入るに
 生もいかに死はするに
 死もいかに生はするに
 夢もいかに醒はするに
 醒もいかに夢はするに
 世もいかに人は生るに
 人もいかに世はするに

三景寺
木枯連風入



秋湖
五



Handwritten cursive text in three vertical columns within a lined frame.

